

文献センター通信

第 26 号
2014 年 3 月 28 日
一部 100 円

所蔵文献紹介

「国際人としての山鹿泰治展(仮)」 5月開催

昨年5月に開催した「雑誌アナキエー (ANARCHY) 展」は、多くの来場者があり大変好評でした。本年も同じく5月に、当文献センターの所蔵文献を紹介する展示を開催いたします。

向井孝さんが整理し、現在は当文献センターに保管されている、山鹿泰治(1892~1970)さんのアーカイブ「山鹿文庫」を取り上げます。山鹿泰治さんは、北京に渡り渡欧旅券を入手するなどして、大杉の日本脱出を助けたことでも知られています。この度の展示では、エ

スペラントや様々な外国語を駆使して、海外のアナキストや反戦活動家と連絡・交流を重ね、国際的な連帯のネットワークを築いてきた、国際人としての山鹿泰治に焦点をあて、山鹿文庫の中から関連資料や写真などを公開する予定です。

インターネットも飛行機での渡航もなかった時代に、素早く正確に海外の情報を国内に伝え、また日本の運動の状況を海外に伝えて来た山鹿泰治さんの功績はとても大きなものです。スイス・ローザンヌのCIRAにも、山鹿泰治さんによって世

主な内容

- 「国際人としての山鹿泰治展(仮)」…1
- シンポジウム報告・田中ひかる…2
- ブラジルのアナキスト図書館…7
- ご報告・近藤文庫は大原社研へ…8
- アナキズムカレンダー14年版訂正…8

界各地の同志に送られた新聞や雑誌が、いまでも大切に保管されています。

グローバル資本主義や原子力発電とそれに伴う放射能汚染など、国境の内側だけでは対処しきれない課題に直面している現在の私たちにとって、軽やかに国境を越えて活動した山鹿泰治さんの仕事を振り返ることは、少なからぬ示唆を受けることになるのではないでしょう。

【実施概要】

- ▼日時：5月24日(土)~31日(土)
- ▼予定：13時~20時(月水を除く)
- ▼場所：イレギュラー・リズム・アサイラム(地下鉄丸の内線「新宿御苑前」駅より徒歩5分)
- ▼入場料：無料
- ▼主催：アナキズム文献センター



1927年、上海労働大学

▼問い合わせ：03-3352-6916 (イレギュラー・リズム・アサイラム13時~20時※月水除く)

【山鹿泰治(やまが たいじ)】

1892(明25)年、京都市三条烏丸に生まれる。1907年上京、住み込んだ出版社有楽社内にあった日本エスペラント協会の事務所で黒板勝美からエスペラントを学ぶ。

11年、職場の原田新太郎から大杉栄を紹介され、アナキズム運動へ。14年、上海に替行、師復の民声社秘密印刷所で『民声』の発行に協

力。帰国後の16年北一輝を訪ね、エスペラントの活用で意気投合、北家に移り家事見習いの重原ミカと出会い、結婚。22年、上海へ行きAF（アナキスト連盟）に日本人として唯一入党。同年、北京で景梅九に大杉の渡欧旅券入手を依頼。23年、大杉らの虐殺の詳細をエスペラント通信で世界各国に送る。27年第5次『労働運動』では海外の運動情報を訳出、またエスペラント講座を連載。同年、上海の国立労働大学にエスペラント講師として招聘される。

46年、移住先の台湾から京都へ引き揚げ。50年アナ連第5回大会を京都に誘致。この頃からエスペラント版『平民新聞』を発行。52年アナ連の代表。54年市川市中山へ移転。戦争抵抗者インター（WRI）の日本登録所を受け持ち、55年日本部機関紙『世界市民』を創刊。60年インドで開催のWRI世界大会に参加。

70年にその生涯を終えるまで、アナキズムとエスペラントを不可分一体のものとして具現し続けた。

アナキズム文献センター（富士宮市）内に『山鹿文庫』がある。

国際シンポジウム 「グローバル・アナキズム の過去・現在・未来と世界と アジアをつなぐために」

前号に引き続き、昨年11月16日に明治大学にて開催された国際シンポジウムにおける田中ひかる氏の報告要旨を掲載します。

報告概要／田中ひかる 「グローバル・アナキズム ムから見た日本とアジア」

この報告では今回のシンポジウムのテーマであるグローバル・アナキズムという視点から日本のアナキズムの歴史を捉え直す方法について検討します。日本を含めたアジアのアナキズム史を国民国家の枠組みから解き放ち、グローバル・アナキズムの歴史につなげるために重要な作業だと思っております。

現代のアナキズムを考える上で過去100年以上にわたるアナキズムの歴史を学ぶことが必要になります。過去というものは、現在とは関わりのないものと見なされてし

まいがちです。実際には、歴史とはすべてその時々状況に基づいて、常に書き換えられ続けるものです。グローバルなアナキズムが展開している今日においては、そのような視点に立った歴史の語りが求められます。

そこでこの報告では、グローバル・アナキズムという枠組みでアナキズムの過去を捉え直すために、アナキズムの歴史を、現在のアナキズムに刺激を与えるアクチュアルなものとして感じるための方法を示します。

そのために必要なのは、国民国家の枠組みから外れた事実と、そういった事実が読み取れる資料に注目することです。なぜなら、これまでアナキズムの歴史は、「日本」「フランス」「スペイン」といった国民国家の枠組みに依拠して記述されてしまうことが多いからです。

また日本のアナキストの間では、1990年代以前、自分たち思想や運動が、西欧からの「輸入」や「借り物」に頼らず、「日本独自」の性質によって形成されているかどう

か、という点にこだわる傾向が見られました。こういった思考の背後にあったのは、日本近代史を彩る近代化・西欧化に対する拒否感や西欧コンプレックス、そしてナシヨナリズムではないかと思えます。

これに対して、現代の若い世代は、国内外のあらゆる情報を我が物として獲得します。彼らは、それらの情報がどこを起源とするか、ということに強くこだわりません。そもそも彼らは、思想の「起源」や「本質」という概念自体に懐疑的であり、むしろプラグマティックにおもしろいものがあれば迷わず吸収していく傾向が見られます。

これから若い世代が、日本のアナキズムの過去を、国民国家の物語からグローバルな文脈の中に置き換えて再読していくことによって、自分たちのよりよき未来を展望することが可能となると私は考えています。ここでは、そのために、2つの方法を提示したいと思います。

1) 日本国外に移住もしくは一時的に滞在した経験がアナキストの思想と行動に与えた影響に注目する。

2) 国外のアーキストによる機関紙上に掲載された日本のアーキズムについて報じた記事に注目すると同時に、そういった記事が掲載される背景として、日本と国外のアーキストとの双方方向のコミュニケーションに注目する。

これら2つの方法に基づく調査においては、国境を越えたネットワークを通じて相互に情報をやりとりしながら思想や運動がどのように形成されたのか、という点に注意が払われます。その結果、日本のアーキズム史をグローバルなアーキズムの歴史という文脈に置き換えることが可能となるでしょう。

1) 国外の経験が思想や行動に与えた影響

日本のアーキストで外国に滞在経験を持つ者としては、1945年以前でも、幸徳秋水、大杉栄、石川三四郎、岩佐作太郎、辻潤、久保謙、山鹿泰治などが挙げられますが、ここでは金子文子(1903-1926)を取り上げます。

日本のアーキストたちの多くは

男性の知識人であり、比較的裕福な家庭と恵まれた境遇を背景にしています。これに対して金子文子は、20年の全生涯を通じて、常に貧困の中にあり、家庭環境も不遇でした。こういった境遇の中、彼女は朝鮮で生活した7年間の経験に基づき、朝鮮人たちとの連帯感情を抱くに至ります。

当時、大多数の日本人は、朝鮮人に対する差別感情を抱いていました。関東大震災で6000人以上ともいわれる朝鮮人を虐殺したのが普通の日本人だったということから、そのように考えてよいと思います。また、今日でも、飛矢崎さんの報告で指摘されているように、戦争やナショナリズムにとらわれ、さらに、韓国人に対するヘイトスピーチに共感する人々の多くが、いわゆるプレカリアートであるということから考えれば、金子文子の人種差別を主張するナショナリストになってもおかしくはなかったでしょう。

もちろん、金子文子は希有な事例だったかもしれませんが、他方で彼女の思想や活動を検討することに

よって、20世紀初頭以来の日本におけるアーキズムをグローバルなアーキズムの歴史という文脈に置き換えるヒントを得ることができると私は考えています。

文子が国家や法律に怒りを覚えた要因は、まず、その生い立ちにありました。1903年、文子は横浜に生まれました。その父親は、妻と入籍せず、文子を私生児として戸籍に届け、文子も認めませんでした。

そのため、無籍者であることを理由に、文子は7歳になっても小学校に通うことができませんでした。母親の嘆願によってようやく許可されましたが、教員から差別され続けました。この点について、文子は後年、

次のように述べています。「現実私が存在しながら無籍なるがためにその現実していることを認めないのが法律であります。法律が確かなる存在を認めておらぬと言うだけの理由であらうもみじめにその存在を無視されたのであります。人間が作った法律の力は現実の存在を左右し決定しうるほど権威のあるものであります」(1924年1月2日、東京

地裁での予審尋問。読みやすく現代風の表記にしている。以下同様)。

文子の両親は、彼女の養育を早い時期に放棄しています。父親は彼女が5歳頃にほかの女性と同棲し、母親も、文子が8歳の時に自分の実家に彼女を置いて再婚しています。1912年、文子が9歳の時、朝鮮に住む父方の祖母が文子を養子として引き取り、朝鮮に渡った文子は、祖父の籍に入れられ、同年、小学校に入學し、1915年に卒業、1917年には高等小学校を卒業しています。

引き取られた岩下家は、地主兼高利貸し、アヘン販売で、植民地支配の末端で朝鮮人から搾取していました。また、文子は、岩下家で雇っていた下男に対する虐待も含め、支配者である日本人による朝鮮人に対する数々の虐待を目撃しました。文子自身は、岩下家で様々な虐待を受け、自殺を図ろうとしたこともありました。

1919年3月、朝鮮全体で起きた3・1運動を目撃し、文子は感激したと後に語っています。ここに、

朝鮮人との連帯を指向する意識が芽生えたと考えられます。

「私どもは日本人ですけれども、日本人が憎くて憎くて腹のたぎるのを覚えます。私があるときただ目に反射されただけの出来事は、大きな反抗の根となつて私の心臓に焼き付けられております。私の在鮮中の見聞は、私をして朝鮮人のあらゆる、日本の帝国主義を向こうへ回しての反抗運動に異常な同情を持たせました。私は上京するとまもなく、多くの朝鮮の社会主義者あるいは民族運動者と友人になりました。私は実際この種の運動をよそ事として手安く片付け去ることができません」(山田、296頁)。

1919年、文子は日本に戻って父親と同居を始めます。しかし、虐待が絶えず、最終的には家を出て様々な不安定な労働につきながら社会主義を学びます。文子は抑圧される朝鮮人に自らを一体化する感情に理論的な枠組を見いだしたのです。

「社会主義は私に、別に何らの新しいものを与えなかった。それをただ、私

の今までの境遇から得た私の感情に、その感情の正しいということの理論を与えてくれただけのことであった。私は貧乏であった。今も貧乏である。そのために私は、金のある人々にこき使われ、いじめられ、さいなまれ押さえつけられ、自由を奪われ、搾取され、支配されてきた。そうして私は、そうした力を持つている人への反感を常に心の底に蔵していた。と同時に、私と同じような境遇にあるものに心から同情を寄せていた。朝鮮で、祖母の家の下男の高に同情したのも、哀れな飼犬にほとんど同僚といったような感じを抱いたのも、そのほか「中略」祖母の周囲に起こつただけのでも相当にある、圧迫され、いじめられ、搾取されていた哀れな鮮人に限りなき同情の念を寄せたことも、すべてそうした心の表れであった。私の心の中に燃えていたこの反抗や同情に、ぼつと火をつけたのが社会主義思想であった」(山田、78―79頁)。

しかし、その後、社会主義者の言行不一致な生活態度に失望する中で、クロボトキンを通じてアナキズムから影響を受けるようになりま

「民衆のために」といって社会主義は動乱を起こすであろう。「中略」指導者は権力を握るであろう。「中略」そして民衆は再びその権力の奴隷とならなければならないのだ。しからば革命とは何だ。それはただ一つの権力に代るに他の権力を持つてすることに過ぎないではないか」(山田、80―81頁)。

ただし、マックス・シュティルナーなどニヒリスティックな思想からも影響を受け、社会構造の転換についても期待を抱くことはありませんでした。ただ、自らが「真の仕事」を見いだすことを重視していた、ということがわかります。

「たとい私たちが社会に理想を持っていないとしても、私たち自身には私たちが自身の真の仕事というものがあ

り」(山田、82頁)。

1922年、文子は朝鮮人たちと交流する中で、アナキストの朴烈に出会い、同志として共同生活を始め、朝鮮人を中心とした組織と機関

誌の発行に従事します。23年3月、二人はアナキストの学習会「不逞社」を設立します。参加者は朝鮮人学生、労働者、仏教徒、キリスト教徒など20数名でした。日本人と朝鮮人による多様な人々による特定のイデオロギーを押しつけない緩やかな集まりでした。

1923年9月1日に関東大震災が発生し、3日に文子は朴烈とともに兵士によつて逮捕されます。逮捕された他の不逞者のメンバーは、朴烈が皇太子の結婚式の際に爆発させるために爆弾を中国から入手する計画があつたと自白してしまいます。朴烈と文子は、自分だけが計画に関わつたと証言して他のメンバーに累が及ばないようにしました。

1926年、二人に対しては死刑判決が下ります。しかし、すぐに恩赦による無期懲役に減刑されました。これは、皇室の慈愛を社会にアピールするためでした。同年、文子は、獄中で謎の死を遂げました。文子自身が自らの思想を説明したのは、以上のような逮捕から死亡に至る獄中の3年間のことでした。

「私は自主自治—すべての人が自分の生活の主となって、自分の生活を治めるところに、うすうすながら私の好きな社会の幻を描いてみる気にもなるのです。私が、自分の行為に要求するすべては、自分から出て、自分に返る、つまり、ピンからキリまで自分のため、自分を標準にする、したがって私が「正しい」という言葉を使うとき、それは完全に「自律的」な意味においてであることを断つときます」(山田、182—183頁)。

「私はたぶん個人主義的無政府主義者と呼んで差し支えなからうと思います。「中略」個人が自我に目覚めるとき、国家は倒れる。むしろ私は、内から燃え上がる秩序ならざる秩序、否真の秩序以外に、国家だの政府だのの干渉はお断りしたいのです」(山田、198頁)。

シュテイルナーから影響を受けた文字の思想は、第二報告者の栗原さんが述べていた「社会」というものに対して個人の「自律」を対置する点を重視しているように思えます。ただし、自らの境遇を虐げられる朝鮮人に重ね合わせたときに独自の性格を獲得している、という点が注目

すべき点です。

グローバルなアナキズム史という文脈の中で読み直す上では、金子文子の思想や活動を、エマ・ゴールドマンのような、同時代に多数登場する女性アナキストと比較していくことが、これからの重要な作業の一つではないかと思えます。

2) 国外のアナキストによる機関紙上で報じられた日本のアナキズム、および、日本と国外のアナキストとの双方向のコミュニケーションに注目する

1923年9月1日以降、平沢計七ら10名の労働運動活動家たちが警察によって、16日には大杉栄と伊藤野枝、甥の橘宗一が憲兵隊などによつて殺害され、また、6000人以上と推計されている多くの朝鮮人が民衆の自警団によつて殺害され

た。10月9日まで、大杉殺害に関する報道は検閲を受けていたため、多くの人々が事件についてより詳しく知るのには、それ以降でした。大杉とともに労働運動社のメンバーだった

延島栄一は、9日の『東京日日新聞』の報道に基づき、日本語で記事を書き、シアトルで発行されたI.W.W. (Industrial Workers of World 国際産業労働者)の機関誌『インダストリアル・ワーカー』の編集部に送りました。ただし、これ以前から、延島は、記事を作成して発送する準備をしていたと思われます。というのも、10月7日付の手紙の中で、延島が次のように伝えているからです。

「我々は現在逮捕されるか、あるいは殺害される、という大変危険な状況下にある。現在の日本における状況を詳細に記述する時間がない。そこで私はこれを日本語で大急ぎで書いた。こちらにいる何人かの日本人同志たちがこの記事を翻訳してくれるであろう」。「これを新聞記事にしたら、その新聞をベルリンのサンデイカリスト・インターナショナルに送り、イギリスのフリーダム・プレス、フランスのリベラールに送ってもらいたい。日本の革命的労働者のために、この情報を世界へと送信するように諸君に要請する」。

(線は田中による)

この要請に基づき、1923年10月31日に発行された『インダストリアル・ワーカー』の一面と二面に、延島の記事の英訳が掲載されました。記事の末尾には、「シアトルにて翻訳」と記載され、記事には、10月9日という日付が記されています。また、延島の手紙の一部も抜粋されて掲載された。延島からのもう一つの要請は、どのように実現されたでしょうか。

まず、1923年11月に発行された『フリーダム』に「アナキストたちが日本政府によつて暗殺される」という記事が掲載されています。ここでは、次のように述べられています。「10月31日付、シアトル発行の『インダストリアル・ワーカー』に詳細が報告され、日本の同志は以下のように述べている……」と。

延島の要請通り、『インダストリアル・ワーカー』がロンドンのフリーダム・プレスに送付され、記事の一部が転載されたのです。この記事の末尾は、以下のように締めくくられています。「本紙1923年

5月号と7月号日本の労働運動に關するコラムを寄稿した日本の同志延島[13]は『インダストリアル・ワーカー』に次のように書いている。「我々は現在逮捕されるか、あるいは殺害される、という大変危険な状況下にある。：日本の革命的労働者のために、この情報を世界へと送信するように諸君に要請する」と。ここから、延島がフリーダムとも以前から関係があり、彼を通じて日本の情報が世界に発信されていたことがわかります。

延島の要請通り、『インダストリアル・ワーカー』は、ベルリンのアナルコサンディカリスト・インターナショナルに送られたと考えられます。この組織のドイツ語機関誌『シナイカリスト』47/48号(11月中旬・下旬)の国際面では、同内容の記事「日本における恐怖政治」が掲載されています。この記事は次のように締めくくられています。「ヨーロッパとアメリカの労働者諸君。日本政府に雇われた、制服を着た殺し屋どもの恥すべき行為に対して抗議せよ。世界各地で日本の代表者ある

いは代表機関といわれているものは、実際には日本の資本主義と帝国主義の手先である。「おまえたちは大杉と彼の友人たちを殺した殺人者だ」と彼らに伝えよ。日本の革命的労働運動万歳。

パリで発行されていた『リベルテール』にも延島による記事は1923年4月と7月に掲載されましたが、『インダストリアル・ワーカー』の記事が何らかの形で転載された事実については、今のところ確認ができていません。ただし、当時の『リベルテール』の編集者アンドレ・コロメル(大杉を国際アナキスト大会に招待して大杉とパリで会っている人物)は、大杉が殺害された事件を、アメリカの新聞から知った、と証言しています。

『リベルテール』1923年12月7日号に掲載された大杉や伊藤野枝の殺害に関する報道は、おそらくは山鹿泰治がエスペラント語で書いた記事を翻訳したものではないか、と推測できます。こちらは10月10日付で、延島の記事の日付である10月9日より1日遅れて出されていますが

掲載されたのは12月です。また、ここに掲載されている似顔絵は、当時の日本の新聞に掲載されて写真をもとにしたものであり、絵の得意な山鹿が、記事と一緒に『リベルテール』に送ったのではないかと推測しています。

以上のように、延島は、英語で記事や手紙を書き、1923年かそれ以前からアメリカとヨーロッパのアナキストやアナルコサンディカリストにむすびついていた。日本の機関誌を見れば、そこにも国外からの情報が常に掲載されていたことがわかります。

もちろん、それより10年以上前から、幸徳秋水などがこういった国際的なネットワークの結節点を作りだしています。大逆事件に対して欧米の社会主義者やアナキストが迅速に抗議行動や支援を展開したことがこれを裏付けています。延島はそれを活用していたとも言えます。

ただし、今回紹介した、大杉殺害報道の場合、シアトルの日系移民社会も重要な役割を果たしていたことがわかります。延島が日本語で書いた記事が、I.W.M.に関わっていた日系移民の中にいた協力者が翻訳することで、世界中に情報が発信されたからです。

た記事が、I.W.M.に関わっていた日系移民の中にいた協力者が翻訳することで、世界中に情報が発信されたからです。

残念ながら、こういった太平洋を越えたネットワークが日本のアナキズムにどのような影響を与えたのかという点については分析できていません。しかし、これだけ緊密な関係があったとすれば、影響を受けなかった、ということはあり得ません。

付け加えれば、資料として残っているものはわずかですが、アナキスト同士が国境を越えてやりとりしていた手紙も重要です。しかし、この報告では、その点を指摘するだけにとどめます。私の『初期社会主義研究』24号(12年10月)に掲載された「日本とアメリカのアナキストによる国境を越えた交流と連帯——山鹿泰治とポリス・イエレンスキーの往復書簡にみる「太平洋を越えた支援」(一) 1948〜51」および、次の25号に掲載される論文をご覧ください。

参考文献・山田昭次『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』影書房、1996年

Biblioteca Social Fábio Luz
リオデジャネイロの
アナキスト図書館
グレープフルーツ

昨年の10月にブラジルを訪れ、リオデジャネイロにあるアナキスト図書館にもおじゃまさせて頂いた。今回はその概要を紹介させていただきます。以下は図書館のブログにある紹介文を部分的に翻訳したものです。

<http://bibliotecasocialfabioluz.wordpress.com/bsfl/>

2001年11月18日、1918年の同じ日にリオデジャネイロでアナキスト蜂起があった日。「ファビオ・ルイス社会図書館 (Biblioteca Social Fábio Luz : BSFL)」はイデアル・ペレスリバータリアン学習サークル CELIP (Círculo de Estudos Libertários Ideal Peres) が保管する書籍、雑誌、定期刊行物を出発点として蔵書を始めた。当初から現在に至るまで、「リオデジャネイロ社会文化センター (Centro de Cultura Social do Rio de Janeiro : CCS-RJ)」の一室を使用しているが、

ここは数百のバイーアの慈善団体に開放されていた建物であり、作家、新聞記者、医師および教師でもあったファビオ・ルイスも20世紀初頭にそんな団体の一員であった。

ファビオ・ロベス・ド・サントス・ルイス (Fábio Lopes dos Santos Luz 1864-1938) はバイーア州ヴァレンサ市の出身であり、1888年に医師の資格を取ってすぐにリオデジャネイロにやってきた。20世紀の初めに、ブラジルの社会小説の初期にあたる2作品を発表した。『イデオログ (Ideólogo)』および『解放されし者たち (Os Emancipados)』である。1904年にできた「民衆の自由教育大学 (Universidade Popular de Ensino Livre)」の創設者の一人でもあり、医師としては当時の連邦区 (注：現在はブラジルが首都だが、以前はリオデジャネイロであった) の郊外

を苦しめた黄熱や天然痘との闘いに一役勝った。労働者の出版物や自由労働組合と協力し、ブラジル第一共和制の独裁政権による弾圧の中、勇敢に組織化を展開した強い労働組合運動をつくるための助力も惜しまなかった。20年代には、ジョゼ・オイティシア (José Oiticica)、カルロス・ディアス (Carlos Dias) やフロレンティーノ・デ・カルヴァーリョ (Florentino de Carvalho) らと共に「解放されし者たち」(Os Emancipados) というリバータリアン思想を広めることを目的としたグループを作った。

現在、ファビオ・ルイス社会図書館には CELIP の蔵書のみならず、ジョゼ・オイティシア・アナキストグループ (Grupo Anarquista José Oiticica : GAJO) や1995年になくなったすぐ後にパートナーにより寄贈されたイデアル・ペレスの個人文庫が加わっている。蔵書は1000冊以上に上り、ブラジル国内外で発表された機関紙や雑誌も数百点保管されている。リバータリアン思想の作品の中でも、アナキズム理論、ブラジルのアナキズム、ラテンアメリカのアナキズム、運動の中のアナキズム、ロシア革命、スペイン



ン革命およびブルードンやバクーニン、クロポトキンなどのアナキスト思想家に捧げられた出版物が主要な部門を占めている。ほかに、ブラジル文学や外国文学、ブラジル史や世界史、哲学、詩なども手に取る事ができる。

一般に向けて開放することで、ファビオ・ルイス社会図書館は一番重要な任務を果たしている。学生、労働者、反業者、失業者などの通読者、新聞、雑誌やその他の媒体が手に入り、人たちが自身で新たな知識を獲得することができ、何より自身のために連帯、協同、相互





扶助に基づいたあらたな倫理を作り上げることを可能にするための役割を担っている。

2007年よりアナキスト研究国際センター(CIRA)と連絡をとり、過去にリオデジャネイロに存在し2年程活動が続いたあと1969年に中断したCIRAブラジルを再編することを視野にいれている。

【参考】

<http://bibliotecasocialfabioluz.wordpress.com/fotos/>
「ブラジル社会／運動の断片」
<http://brasilpoderpopular.wordpress.com/>

ご報告

近藤文庫は大原社研に

白仁成昭

千浪の亡き後、近藤文庫の行く末について、皆さんにご心配をかけたのですが、昨年十一月、法政大学大原社会問題研究所に、まとめて引き継いでもらいました。

現在、大原社研で整理、目録作成の作業が進められており、この作業が終り次第、大原社研「近藤文庫」の名前で公開されるはずで。

この種の史料はプライベート・アーカイブの形で管理・保存されて行くことが一番だという思いは残りますが、散逸を防ぐことを第一に考え、仲間たちの助言を受けて、こういう形になりました。

書簡の目録作りにお力を貸して下さったみなさん、そして、文庫の行く末を心配して下さったみなさん、本当に有り難うございました。

おわび

アナキズムカレンダー

2014年「ギロチン社事件」

訂正と補足説明

【訂正】

・12月をはじめ8月の写真(右)キヤプションなど、新谷「興」一郎は全て「與」の間違いです。

・9月の「小西武夫」において「小阪事件で捕らえられ」とありますが、小西武夫は小阪事件には関係してお

りませんでした。

【補足説明】

・廣畑研二さんより、「新谷與一郎」が別人の可能性があると指摘を受けました。問題となるのが、10月「古田大次郎」に掲載された古田の通夜の写真(左上)。

「右から4人目が新谷與一郎」としておりますが、このとき既に新谷は獄中におり、保釈中ではない限り、この日の通夜には出席できないこととなります。廣畑氏が調べたものの、保釈の事実はないということでした。今後の研究を待ちたいと思います。



アナキズム文献センター通信第26号

発行／2014年3月28日

発行所／アナキズム文献センター

編集／運営委員会

連絡先／東京都新宿区新宿

1-30-12-302

郵便振替口座／

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール／info@cira-japan.net

定価／一部100円